

# 福田雅之助のテニス哲学「この一球」がスポーツマンシップ形成 及び人間形成に果たす役割

The effect of Fukuda's philosophy of tennis "kono-ikkyu" on sportsmanship

1K04A161

富江 知孝

指導教員

主査 中村好男先生

副査 石井昌幸先生

## 【第一章 緒言】

この一球は絶対無二の一球なりされば身心を擧げて一打すべし

この一球一打に技を磨き體力を鍛へ精神力を養ふべきなり

この一打に今の自己を發揮すべし

これを庭球する心といふ

日本テニス界の先駆者・福田雅之助が記した「庭球規」である。早稲田大学庭球部の部室にも額に入れられた直筆の全文が飾られており、私の大学でのテニス生活では、この言葉を嘯み締めながら練習に打ち込み、試合に臨んだ。

昨今、スポーツ界では大麻所持などの不祥事が相次ぎ、スポーツ選手のモラルの低下が叫ばれている。そこで今、改めて福田の「この一球」に代表されるテニス哲学を見直すことが本論文のテーマである。このテーマを掲げた理由は、福田が早稲田大学庭球部員の一人に贈った「庭球規」が今もなお、早大庭球部卒のテニスプレーヤーのみならず、多くのテニス愛好家、更にはテニス界を越えて世間一般に知られ、名文句となっているからである。また、広く知れ渡るようになった理由として、松岡修造と漫画『エースをねらえ！』を挙げられる。

本論文は主に以下の三点を主題とする。1)「この一球」という言葉が生まれるまでの経緯を、福田の著作や機関誌、新聞への記事から探る。2) そこから、福田のテニス哲学について考察する。3) それらを現代のスポーツマンシップや人間形成にどう活かすかについて考察する。

## 【第二章 この一球が生まれるまで】

日本代表選手として海外を転戦する福田だが、プレーヤーとしては苦悩の日々であった。福田は同時にテニス・ライターとして国内外の試合を観戦し、日本のテニス界の発展を客観的な視点から見てきた。その過程で1941年に、早稲田大学庭球部部員に「庭球規」として「この一球」が贈られている。これは日本のテニス界全体に向けた福田のメッセージとも考えられる。福田はスポーツマンシップを武士道と一致したものと捉え、「庭球道」を唱導した。「この一球」は禅や武士道などの思想を下敷きに、福田のテニス哲学が集約されたものである。

## 【第三章 福田のテニス哲学】

ここでは、特に福田が重んじていた5点「スポーツマンシップ」「コートマナー」「フェアプレーの精神」「グッドルーザーであること(いかに負けるか)」「練習への取り組みについて」を切り口に福田のテニス観を考察した。スポーツマンシップにおいては、論語の「夫子の道は忠恕のみ」がそれに当たると結論づけた。

## 【第四章 まとめ】

「この一球」が生まれる背景には、テニスと真摯に向き合い、そこに哲学を見出した福田の人生があった。武士道、禅など日本独自の思想に立脚したもので、スポーツマンシップ形成のみならず、本質的な部分は現代の社会問題にも一石を投じる内容である。

これらを現代に活かすための第一歩として、テニスをプレーする少年少女に、「この一球」を始めとする福田のテニス哲学を題材にして、スポーツマンシップやコートマナーについて考える機会を増やすことを提案した。その具体例として、日本テニス協会主催「幼稚園・小学校マナーキッズテニスプロジェクト」を挙げた。

テニスは老若男女問わず、誰もが楽しめる社交スポーツであり、同時に心技体の極限を争う競技スポーツでもある。だからこそ、福田はテニスを愛した。そしてどんなプレーヤーにも平等に、「この一球」が与えられる。

第一章で触れた松岡は「この一球」を、「未来のことを思うと不安になる、過去のことを思うと怒りを感じる、それならば“今、ここ”を一生懸命生きる！ということだと思います」と理解した。たとえ福田が到達した「この一球は絶対無二の一球なり」の境地と、『エースをねらえ！』作者の山本鈴美香が作品にこめた意味と、山本の作品を通して福田の言葉に巡りあった松岡の内的エネルギーとが違っていたとしても、一人でも多くのテニスファンがそれぞれ「この一球」を発見するきっかけになるならば福田は満足し、好きなパイプを燻らせながら黙ってうなづくことだろう。